
コード2112

水面 幸陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コード2112

【Nコード】

N3950D

【作者名】

水面 幸陽

【あらすじ】

俺には感情が無い。それ故に感情を求めた。自分の知らない世界。そこで俺が出会ったのは…

プロローグ

俺が目覚めたのは西暦2112年。

そして俺が生み出されたのは西暦2100年だと記憶メモリに保存してある。

俺は戦争用に生み出された戦闘用アンドロイドと言っことらしい。

俺の名前は目覚めた日にちなんで『コード2112』。

『名前』とは不便だ。

勝手に付けられた呼称を一生背負わなければならない。

そして試作品のせいか、俺にはないものがあるらしい。

幸か不幸か。

俺には『心』と言っものがなかった。

喜び

悲しみ

怒り

楽しみ

後悔

全てにおいて欠落した俺は俺を欠陥品として扱う。

そして見返してやるのだ。

俺に『心』を植えつけなかった科学者共を。

俺が持っているのは右手に内蔵されたコンバットナイフ。

人間は『服』を着て、『歩い』て行動するという情報を元に俺は研究所を抜け出した。

何も心配することはない。

俺の旅立ちを祝ってくれたのは小鳥達だけだった。

第一話：接触

俺は『街』に出ようと思う。

俺のデータには『街』には食事、衣服、家が存在する。
幸い『金』とやらは不自由しないよう研究所の科学者共から取り上げてきた。

そう、心配することはないのだから。

俺は限りなく人間に近い存在だと科学者共は言っていた。
足りないのは『心』だけだと言う事も奴等の会話からデータとして採取している。

『世の中』を生きていく方法は何通りもあるらしい。

俺は人間としての年齢は『17歳』。

『学校』と言うところに通う年齢だった。

奴等は…科学者はいつも言っていた。

お前はいつか日本の最強で最凶なる兵器になるのだと。ならば、
いつか『ならばそれまでの
時間を俺に与えてくれてもいいはずだ。』

そうこう考えている内に俺は『街』にたどり着いた。

周辺の地図を頭の中に展開する。

『商店街』 『駅』 『喫茶店』 『高校』 『市街地』 …

なるほど、結構沢山の施設があるんだな。

俺は限りなく人間に近くなっている。

食物の摂取によりエネルギーを補充することができる。声帯もあるから声を出すこともできる。『コード2112』としての情報だけでなく、人間社会での『個人情報』とやらも偽造されている。だから、

心配することはない。

いや、元より心のない俺は『心配』をすることがない。そっごう考えながらついた場所は『公園』だった。

「なるほど…」

俺は『生み出されて』初めて声を出した。公園とはこういうものだったのか、と感嘆する。脳内の情報では、

『子供の交流の場。』

とあつたが、子供だけでなく大人なる存在もあり、犬などのその他の哺乳類もいる。何だか…

「楽しい…」

……え？

俺はしゃべってないぞ？

そう思っただけは横を見る。

そこにいたのは人間の女だった。

身長は俺よりも少し小さい。年齢が俺と同じなら『平均的』な値になるであろう。

間近で人間の女を見たのは初めてだった。観察を試みる。黒くて長い髪。

顔は『絵の具』で混ぜたような肌色。

細身の体型にそこそこ『普通』のサイズ。

3D視点のグラフィックは常に正しい情報を与えてくれる。

「私に何か用ですか？」

はっ、とした。

ずっと見ている俺の視線が気になったのだろう。

「いや、何でもない。」

人と話したことのない俺は少し『戸惑う』。

『戸惑う』？

『戸惑う』とはどういうことなのか？

「君は…よくここへ来るの？」

「初めてだ。」

「じゃあ何で皆を見て笑っているの？」

「笑ってなどいない。」

「…ふーん。ふふふ…」

「何故笑う？」

「笑ってないよ。」

これが『会話』。
なるほど、楽しいものだ。
研究者達がしようとしていたのは『会話』ではない。『接触』だった。

「君の名前は？」

ひとしきり言葉を交わした後、女は俺に聞いてきた。
二度と会わないであろう関係なのに名前を聞く意味などあるのだろうか？

「コード2112。」

だからこそ答えておこうと言つものなのである。

「あはっ…何それ？」

女は苦笑して、

「私の名前は……」

第二話：学校

俺は街を出た。

とは言つてもすぐに隣の町に出るだけだった。
東京23区が2056年に一つになった場所はどうにも広い。
元々杉並区と呼ばれていた場所が一番治安がいらしい。
最も、自分の向かう先は『心』を知れる場所だ。

「みずまちしぐれ水町時雨……」

先ほどの公園で聞いた名前を思い出す。
特に意味があったわけでもない。
何故か耳に引つ掛かるような感じがただけだった。

さて、何処へ行こうか？
時間と資金はたっぷりとある。
何処なら俺の『心』を見つけれられるだろう？

何処なら。
そうだ。学校なる場所に行ってみよう。
俺の設定年齢なら入れるはずだ。

この近くで一番近い学校は…？

『西条高等学校』

偏差値は中の下。

生徒数は200人、つまりは一学年に約60人の学校。

そこそこ『不良』がいるとか言う場所。

まあ世間一般の目に映るとすれば、

「普通…」

細かい申請とかは良く知らないが、入学ぐらい簡単にできるだろう、
と思ったのは間違いだった。

「書類は？名前は？保護者は？」

丸い眼鏡をかけて腹立たしそうに『校長』は言った。

「書類は…ない。名前はコード2112。保護者は存在しない。」

俺はそう答える。

そう、俺は書類などあるはずもなく、名前はコード2112であり、
保護者などは存在しない。

俺は正直者だ。

「そんなはずがある訳なかるうに。」

校長は額の汗を服の袖で拭った。

この時代に親無しと言つ子供が珍しいとでも言つのだろうか。

「まあいい。とりあえず君の家は？」

とりあえず、と言つ言葉が耳に掛かるが俺は正直に答える。

「無い。」

そう。俺に家は無い。

「君はどこまで…」

ふざけているんだ？とでも言いたいのだろうか。

「何が？」

「うん？」

「何が駄目なんだ？」

俺は最初からの疑問を口にする。

「何故俺の入学が認められない？」

もう我慢などと言つことはできない。

これが感情ではないことを祈るだけだ。

「それは…」

第三話：二度目の接触

「ふう。」

俺は結局学校に入ることなくその門を出た。

緑色のペンキで染まった門はギィ…と軋む。
それにしても…

「それは…」
金。

そう、高校に入学するには入学費、授業料、施設費…など金がかかるらしい。

しめてその総額、

「五十万円…」

しかもそれが初年度だけと言うのだから問題だ。
今の俺の手持ちは六十万程。

一年間学校に行くだけで全てが散ることになる。

流石に家出初日で文無しと言うのはまずい。

俺は学校から二キロ程離れた河原にいた。

特に何があるとかと言うわけではなく、ただ歩き続けていたらここに着いていた。

買い物帰りの自動機械が頭の上を通り過ぎる。
ヘルバイラン

ふと、右手の掌をしてみる。

そこには軟鉄で作られた骨格の代用品となる枠組みの回りに人工血管があり、さらにその回りを人工筋肉が犇いて最後に人工皮膚が貼り付けてある。
そのはずなのだった。

「訳わかんねえ。」

俺はアンドロイドなのか？

さっきは腹が減って食事をした。

研究所では食ったものが体内で燃焼されてエネルギーになると聞いた。
た。

その前は公園でボールが頭にあたって『痛』かった。

研究所では最新の感覚連動装置を使用していると聞いた。

そして今。

右手を草で切ってしまった。

切り口には血が滲んだ。

研究所ではそんなことはなかったからどうなっているのかわからない。
い。

俺は…

「本当に…」

「本当に？」

ん？

横を見ると昼の時の、

「水町時雨？」

「おお！名前覚えてくれていたんだ？」

時雨はにい、と笑った。

俺にはわからない。

名前を覚えられることはそんなにも嬉しいことなのか。

「で、君はコード2112、でしょ？」

…あまり嬉しくない。

「いや、違う。」

つい言ってしまった。

どうせここは研究所じゃない。

どんな名前でもいいなら好きな呼称を自分につけてみたい。

「ははっ。わかってるよ。いまだきそんなセンスの無い名前のある人なんていないもんね？で、本当の名前は？」

「俺は…」

「奏葉水仙。」

そう。研究所にいたあの研究員の名前。

一番俺に良く接してくれていたことを今もまだ覚えている。

「へえ？水仙君…ね。」

「ああ。」

その日。

俺は人と会話することを覚えた。

第四話・三度目の接触

「じゃー！これで。」

時雨は右手をピシ、と振り上げて敬礼の形をとると、走り去っていった。

もう既に真っ暗となった河原には俺しか残っていない。

さて、何処へ行こう。

もう行くところはあるのだろうか？

俺に必要な場所は…

否。

俺を必要としている所は唯戦場のみ。

戦闘用アンドロイドとして『生きる』しかないのか？

「もう…」

戻ろうか？

俺は五時間ほど腰を置いていた坂から立ち上がる。

俺が戦場へ行くのはいつの日か。

その日までは俺はまた研究所に籠り続ける毎日。

今までと同じ。

まったく同じでまったく変わらない。

短い家出だった。

後一キロも歩けばもとの日常。

街はもう出て、見当たるのは殺風景な道路の脇にある洋食店と研究所の影ぐらいだ。

その時だった。

「オラア！」

その洋食店の窓を突き破って男が一人出てきた。一人はナイフを持っていると言ったことがわかる。あろうことか。そいつらは俺の方に走ってきた。

「んあ？」

片方が俺に気づいたようだった。その頃には。

「がアアッ！」

ナイフを持っていないほうは地面にひれ伏していた。簡単なことだった。

合気道。

俺にはこの業がある。

「お前っ！」

もう片方がナイフを大きく振りかぶる。が、もう遅い。

「う…おっ…」

「犯人確保にご協力いただき、有難うございます。」
警察の声でした。

俺は少しばかりボーっとしていたようだった。

「被害者の水町さんがお礼を言いたい…と。」

…水町？

聞いたことがあるような。ないような。

「あれ？君は…水仙君！」

それは二度目の衝撃だった。

第五話：水町家

「いやー！世界は狭いねえ。」

時雨はそう言うが、俺はそうは思わない。と言つよりもそっちの方を考えている暇すらない。

何故俺はこの家にいるのか？

何故俺は水町家族四人に囲まれているのか？

そして…

「お前は時雨の何なんだアアアア？！」

と叫びながら猟銃を持ってきた父親らしき男に対して俺はどうすればいいのか？

「とりあえず、ありがとう。」

何故か顔中に傷を作り、さらに隣に拳をグーに握った時雨を従えて父親である水町みづまち瀬矢は俺に頭を下げた。

「お前のお陰で店の金は守られたよ。いや、本当に。」

瀬矢が言葉を発する度に時雨が目を走らせているのは気のせいだろうか？

「ありがとう！」

「ありがとう！」

父親の後ろで騒いでいた時雨の弟と妹の双子も同じく頭を下げる。

「えっと…みずき君、だっけ？今日は泊まって行きなよ。がっ、泊まって下さい。」
言葉の途中で時雨が瀬矢を殴る。
俺はあと一日くらいなら、と思い
「ではお言葉に甘えて。」

社交辞令。

そんな言葉だったような気がする。

「みずきおにーちゃん！今日は泊まるの？」

「泊まるの?!」

双子の兄妹…陽政よつせいと雪乃ゆきのは俺に纏わり付いてくる。

研究所にいた時は子供を見たことが無かったので少し興味がある。

「ああ。」

嘘はついていない。

「じゃあ遊ぼ！」

「遊ぼ?!」

陽政に雪乃が続いて俺に話しかける。

「ごめんね。少しだけ相手してやってよ。」

時雨も台所から顔だけ出して言う。

振り向いて瀬矢に助けを求めようとしたところ、

「…、。。」

何か呟いたようだったが、おそらくは拒絶の反応だろう。

そして百八十度顔を回転させると、

「遊ば！」

「遊ば?!」

人工筋肉でも筋肉痛は起きないことを祈るばかりだった。

「ご飯出来たよ〜！」

時雨の声で俺はやつと陽政と雪乃から解放された。

近代社会のこの世で、是非とも『幼児用お遊び相手ロボット』を作つてほしい。

「おお！飯だ！」

瀬矢はさっきの俺に対する態度とは打って変わり、席に付く。

「水仙君の椅子はこれで我慢してね。」

と言い、時雨はピアノのところにあつた椅子を俺のところを持ってきた。

その椅子を見る限り、かなりの期間使われていたようだった。

「我慢してね！」

「してね?!」

兄妹の催促もあり、俺はゆっくりと腰を下ろす。

「いただきます！」

家庭の味とはこのようなものを言っただろう。

俺は今日、一家団欒を学んだ。

第六話：旅立ち

「うー……。眠い。」

時雨の朝の第一声がそれだった。

向こうはピンク色の水玉模様のパジャマを羽織り、今水仙の前に立っている。

ただ、そのパジャマは上しか存在しなかった。

「うー………?」

俺は懇切丁寧に説明して逃げるか目を瞑るか迷った。

昨日の瀬矢の様子を見た限り、こいつはとんでもなく厄介な人間だと言っことを学んだ。

さあ。どうする？俺。

逃げるか。

目を瞑るか。

「穿けよ。」

なるほど。

朝のパンチは日本の伝統的なあいさつか。

「はっはは！なるほどお。それで頬が真っ赤に?!」

瀬矢はそれはもう虫唾が走るほどの声で笑った。

その横の時雨はパンチで彼を黙らせる。

「ん…？まああれだ。思春期特有のゴボオ！」

瀬矢は何か言おうとしたがその首が右から左へと曲がる。

「特有のー!!」

「特有ー?」

双子の声もそこにはあった。

朝八時。

「あつ…遅刻する！行ってきます！」

時雨は寝癖も直さないままに部屋を飛び出していった。

先ほど見えた制服の紋章。

『西条高等学校』の紋章だった。

「水仙は学校行かないのか？」

「学校ー。」

「こー?」

瀬矢と双子は俺に向かう。

「行けません。学費が五十万もするので。」

本当のことだ。

「おいおい。流石に五十万ぽっちが払えない親なんているのか?!」

「俺には親がいません。」

「な…じゃあ保護者とか？」
「一人です。」

沈黙。

「なら何処に住んでいるんだ？」

「家もありません。」

そう。それで俺はこの家から立ち去ればいい。

そして光の届かない漆黒の闇にて時を待てばいい。

「じゃあここに住め。」

…は？

「いや〜！時子が死んでから人手が足りなくて困っていたんだ。うん、お前は幸せだ。三食宿付きアルバイト何て今時無いからなあ！」

「おっしゃっている意味が良くわからないのですが？」

「言ったとおりさ。」

瀬矢は双子の頭に手をのせた。

双子はやや邪魔そうに首を振るが、無駄なことだと知りがつくりと頭を下げる。

「こいつらの母親はもういない。あいつも頑張っているが限界がある。見たところお前は腕が立ちそうだし賢そうだ。」

ハハオヤ…あいつとは時雨のことだろうか。

「な？悪い話じゃないだろう？」

俺は研究所に還らなければならない。

それは必然であり、義務でもある。

しばらく経てば研究者共が俺を探すだろう。

その時に俺がここにいれば迷惑になる。

駄目だ。

駄

目だ。

「いえ。遠慮します。俺には行く場所があるので。」
右手を左右に振って、水町の家を出ようとその部屋を出る。

ガシリと、俺の両足を掴む手があった。

「駄目。」

「駄目？」

陽政と雪乃はどうにも俺を引きとめようとしているらしい。その気になれば力ずくで行くこともできる。が、流石に子供を蹴散らして帰るのは気が引ける。

「あー…やめとけ。」

助けを求めようと瀬矢に目を向ける。

「そいつら、絶対に放さないから。」

「放さない。」

「さない？」

…

「悪いな。俺は行かないといけないんだ。」

陽政の肩に手をおく。

俺は諭すように言う。

「はじめを付けないといけないんだ。」

陽政も雪乃も俺が何を言っているかわからないだろう。

若干六歳の子供の脳にはじめなんて言葉があるはずがない。

「いいか？」

雪乃のほうにも向いて言う。

瀬矢は遠巻きに眺めているだけだ。

「帰ってくる？」

「帰ってくる。」

二人と俺は約束する。

無傷で帰る兵器がこの世にあるのなら。

第七話・終焉

「、、。」

「、、。」

「。」

「、、。」

「ち……に。」

「？」

「最期に手紙を残したい。」

「……かに……。」

「ありがとう……。」

カサリ

久しぶり。奏葉水仙だ。

まだ覚えていてくれてるか？

覚えていないならこの手紙をすぐに捨ててくれて構わない。
覚えているのなら二枚目まで見てくれ。

カサリ

本当に久しぶりだな。

とは言っても一年ぶりだが。

俺は最初にお前に会った時に言ったよな。俺の名前は『コード21
12』だって。

あれは本当だ。

水仙なんて人間はこの世にいない。

むしろ俺は人間ですらなかったのだから。

お前が読む頃には俺がニュースに出ているだろうと思う。
何て言ったって俺は戦闘兵器だからな。

カサリ

そうそう。一つ言い忘れていたことがあるんだ。
もし俺が帰ったときの為に。

お前のとこの双子には約束は守れないかもしれない、と伝えてくれ。
瀬矢には例の話、承知したと伝えてくれ。

そして、お前には。

カサリ

ありがとう。

「ちょっと…」

俺は今アメリカ大陸の真っ只中にいる。

俺を取り囲む数百万の兵隊と何千もの戦車や戦闘アンドロイド。
なるほど。アメリカはこれほど俺を危険視していたわけだ。
ならば。

この俺の恐ろしさ。

身を持って知るがいい。

俺は泣いていた。

「。9T0N04ノ編」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950d/>

コード2112

2010年10月13日15時38分発行